

REACT

2015年12月号



絶え間ない争いが 人びとを追いつめる

パレスチナ 占領も苦しみも黙認は許されない

イエメン 住民や市場・医療施設も攻撃対象に
ナイジェリア 過激派の暴力が越境
派遣スタッフの声(シェラレオネ)



子どもたちが予防接種チームになった!

2015年8月29日～30日、東京・渋谷で開催の子ども向けイベント「ワークショップコレクション11」に、国境なき医師団(MSF)が出展。「届け、ワクチン！2015キャンペーン」との連動企画で、世界の子どもを病気から守る予防接種活動の挑戦を伝えました。MSFのチームになってアフリカの奥地にワクチンを届けるすごろくゲームや、予防接種グッズの展示など、初めて触れる援助活動の話に子どもたちは興味しんしん。2日間で300人以上が参加し、熱気に満ちたブース。“未来を担う子どもたちが、世界につながるきっかけができたかな……”スタッフの夢も膨らみました。



特定非営利活動法人 国境なき医師団日本

寄付や『REACT』に関するお問い合わせ

0120-999-199 (9:00～19:00 無休)

〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 早稲田SIAビル3階
Tel : 03-5286-6123(代表)

www.msf.or.jp

『REACT(リアクト)』は国境なき医師団(MSF)日本が発行するニュースレターです。MSFが活動現場で目撲する世界の人道的危機と、命を救うための人道援助活動についてお伝えし、ともに考えていただくための情報をお届けします。

国境なき医師団は、1971年にフランスで設立された、非営利で国際的な民間の医療・人道援助団体です。危機に瀕した人々の緊急医療援助を主な目的とし、医師、看護師をはじめとする約7000人以上の海外派遣スタッフと、約3万1000人の現地スタッフが、約60の国と地域で活動しています(2014年度)。

アンケートのお願い

国境なき医師団の活動地の状況と活動内容をより分かりやすくお伝えするため、ぜひアンケートにご協力ください。郵送またはウェブサイトにて、ご回答いただけます。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選で10名様に「届け、ワクチン！すごろくゲーム」を差し上げます。



郵送 郵便はがきに、ご住所、お名前、年齢、職業、アンケートの回答をご記入のうえ、左記の住所までお送りください。2016年1月末日消印有効

宛先 国境なき医師団日本・広報部宛

Web トップページ→MSF図書館→読み物→『REACT』2016年1月末日まで受付
※お寄せいただいた個人情報はアンケート分析にのみ利用いたします。

○次の①～④には[ア そう思う イ そう思わない ウ どちらともいえない]から選択して、⑥⑦には自由回答でお答えください。

①世界の人道危機や医療ニーズへの理解は深まりましたか。②MSFの活動への理解は深まりましたか。③MSFは活動について十分に透明性をもって報告していると感じますか。④今後もMSFを支援していくと思いますか。⑤特に印象に残った記事を2つ教えてください。⑥ご意見・ご感想を自由にお聞かせください。⑦MSFへの支援に込める気持ちをお聞かせください。

信頼にお応えするため 情報開示を続けてまいります

独立・中立・公平を遵守する国境なき医師団(MSF)の医療人道援助活動は皆さまからの寄付に支えられています。ご支援くださる方々のご期待と信頼に応えるため、MSFは活動と財務の透明性を重視し、毎年その詳細を『MSF日本活動報告書』『国際版活動報告書』『国際版財務報告』として、公式サイトで公開しています。ぜひご覧のうえ、忌憚のないご意見をお寄せください。2015年も多大なご支援を賜り、深謝申し上げます。

2015.12 CONTENTS

ACTIVITY NEWS

4 イエメン
住民や市場・医療施設も攻撃対象に
援助も圧倒的に不足

6 パレスチナ
占領も苦しみも黙認は許されない

地中海 IN FOCUS
8 生死を分ける漂流から
小さな命をも守るために

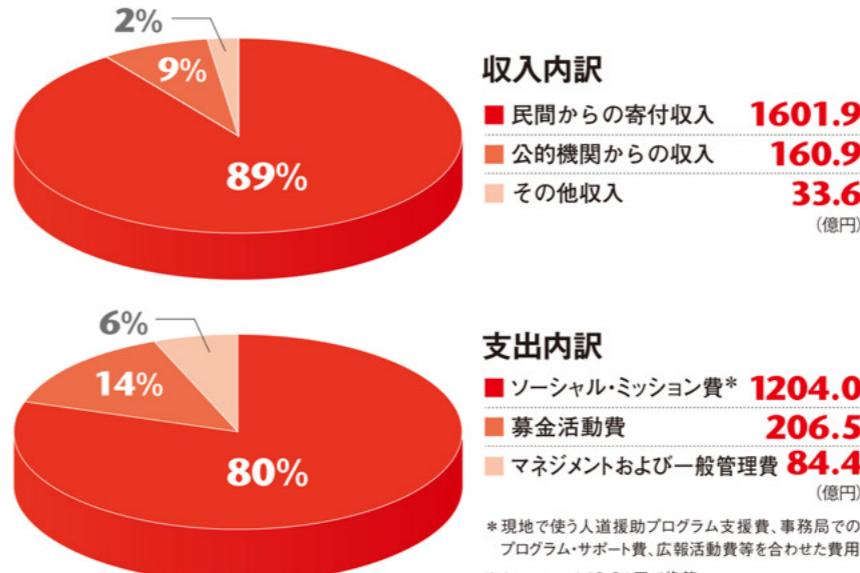
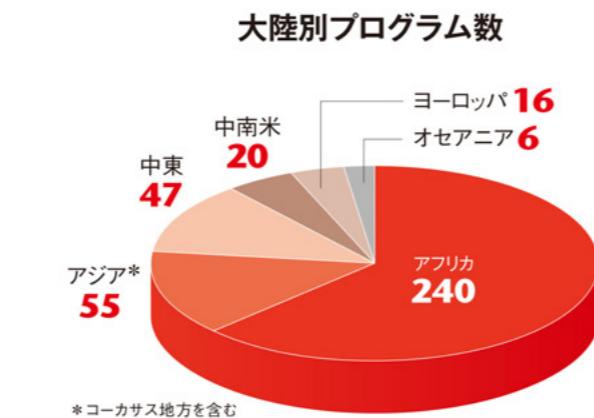
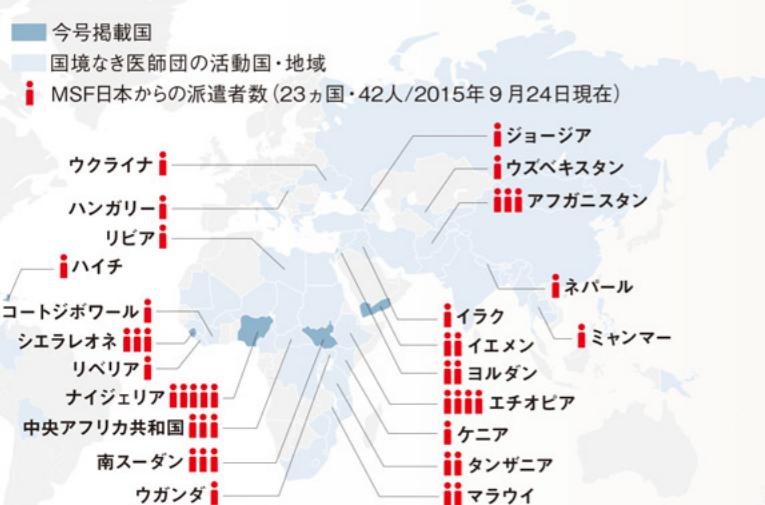
10 南スーダン
再燃を重ねた内戦
拡大する医療ニーズ

12 ナイジェリア
過激派の暴力が越境
チャド湖周辺の危機

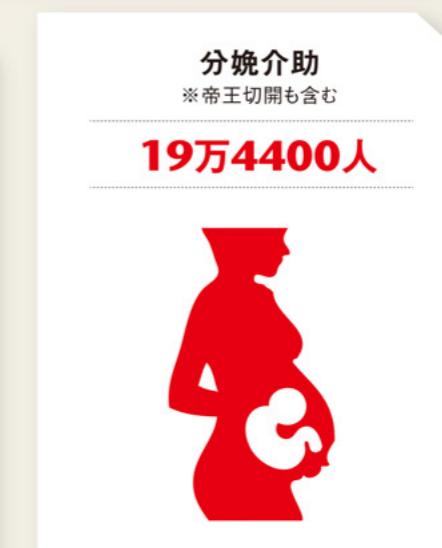
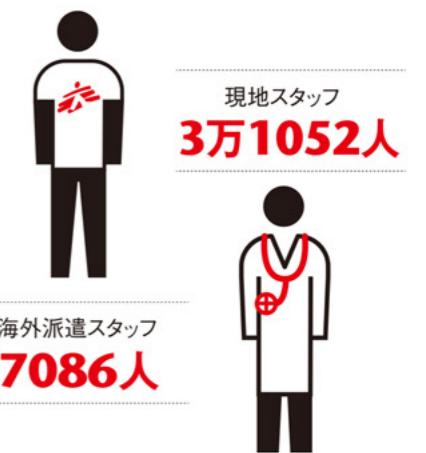
7 VOICE 派遣スタッフの声
中山 恵美子 (救急専門医/シェラレオネ)

Field Stories フィールド・ストーリーズ
13 菊地 寿加 (看護師/南スーダン)
村上 千佳 (助産師/ハイチ)

14 支援者のひろば



スタッフ数



<表紙>内戦で傷ついた南スーダン・ベンティウのMSFの産科施設で、緊急帝王切開で生まれた赤ちゃん。
ベンティウでは8月から9月にマラリアが大流行し、MSFは毎週4000人余りの患者を治療した。

活動地からの声

紛争による重傷患者を治療
運命を受け入れる姿に心打たれた

外科医 池田知也

今年4月から約2ヵ月間、南部のアデンで活動しました。空爆が激化していたため飛行機では現地に入れず、アフリカ東岸のジブチから船でアデン湾を渡りました。活動した病院の内からも、銃声、空爆、戦車の発砲音が聞こえました。

治療したのは、すべて紛争による外傷患者でした。当初は狙撃手に撃たれた負傷者が多かったのですが、戦闘が激化するにつれ爆発に巻き込まれた被害者が増え、腕や脚の切断を余儀なくされる患者も多くいました。限られた医療資源の中、十分な集中治療が行えず救命できなかったことや、また、再手術が必要となることもあります。そんなときでも、本人や家族は「アッラーが決めたことだから」と受け入れます。下肢の切断は本人や家族には辛い手術であったと思いますが、手術直後に「ありがとう」と言ってくれ、食事の間に鉢合わせすれば「何か食べて行きなさい」と声をかけてくれる。そんな人びとの姿勢が非常に印象的でした。

自らも紛争の被災者
現地スタッフの献身に感謝

ロジスティシャン 小野不二雄

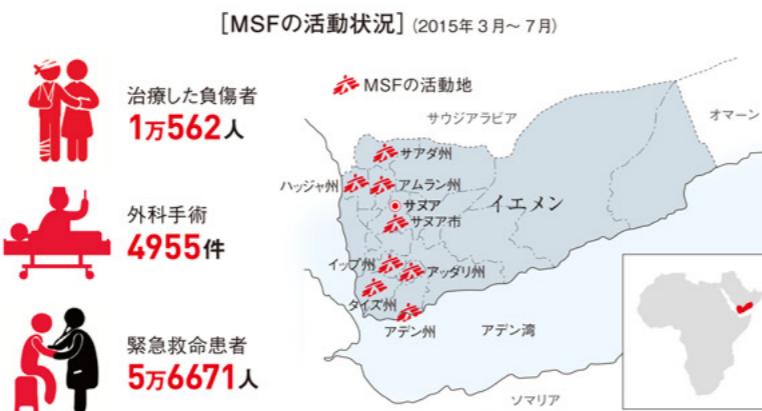
アデンでは7月、半日の間に約150人の負傷者が運ばれてきて、うち42人の死亡を確認、そのすべてが一般市民という日がありました。8月に入ると空爆や砲撃が市街地にも及ぶ深刻な状況で、さらに地雷で負傷した市民も増えました。ロジスティシャンとしては、両軍の検問や戦闘をくぐり物資を運搬することが困難で、物資や現金の不足に苦しみました。

一緒に働く現地スタッフも、被災者でした。家が被爆した人、家族が負傷した人。同僚の運転手の一人は後に爆撃で亡くなりました。そのような中でもスタッフ皆がMSFの活動に共感し、患者を救うため毎日懸命に働いてくれました。彼らの献身なくしては活動も成り立たなかつたと、感謝と尊敬を感じます。

紛争地でも医療を提供するのがMSFの活動ですが、市民の負傷者を受け入れるたび、そこで起きているのは人命の尊厳に対する侵害だと痛感します。私たちの活動の背景にある現実についても、思いを巡らす必要があると感じました。



① 2015年6月12日、深夜1時の首都サヌアに爆弾が降り注いだ。写真は、住宅4棟のがれきを掘り起こし、行方不明者を捜索する男たち。少なくとも6人の遺体が発見された。② 3月の紛争激化以降、アデンでMSFが運営する緊急外科病院に迎えた負傷者の数は7月までに4000人以上に上った。③ ベニ・ハッサン近くの国内避難民キャンプ。この写真撮影の2日前、人びとにぎわう同市の市場が空爆の標的に。④ 南西部タイズ州、家族の埋葬を終え、座り込む男性。同州では7月2~5日、空爆により、MSFが支援する病院に109人が搬送してきた。



市民への攻撃は許されない

MSFは同州で、複数の地元病院を支援するとともに、医療物資・薬の提供も行っています。

しかししながら、国内は、空港、港湾、橋梁、道路など、重要な輸送・交通インフラの封鎖された状況が長く続き、必要な医薬品が圧倒的に不足しています。食糧と燃料の90%を輸入に頼る同国においてはライフラインを断たれたも同様で、深刻な飢餓も懸念されています。

こうした状況は、MSFの活動にも大きな障壁となつており、日々、高まる医療や支援物資のニーズに対して、十分な援助ができるない事態に陥っています。

MSFは同国において1986年に活動を開始し、2007年以降、継続的に活動に取り組んできました。3月の紛争激化以降、8つの自治州で1万人以上の負傷者を治療、9月中旬までに390トンの医療物資を搬入しています。

援助拡大に対する国連と連合軍の合意は、いまだ実現していません。窮屈する人びとの援助を可能にするため、MSFは、医療施設と医療従事者の中立性を尊重し、人びとが支障なく医療を受けられるよう、休戦・停戦合意を含め、紛争当事者へ呼びかけています。



住民や市場・医療施設も攻撃対象に 援助も圧倒的に不足

激しい空襲・砲撃に加え、インフラ封鎖によりライフラインを断たれた人びとは最低限の生活を送るための手段すら奪われた状態に陥っています。

3月の紛争激化以降、国境なき医師団(MSF)は、さまざまな困難を抱えながらも助けを必要としている人びとのもとへ医療・人道援助を届けています。

3月中旬に激化した、ハディ暫定大統領派を支援するサウジアラビア主導の連合軍と、反体制派の武力派である「フーシ派」および前大統領派勢力間の争いは5ヵ月を過ぎても収束の気配すら見えず、多くの人がびとに深刻な影響を及ぼしています。当事者が民間人の密集している地域や施設を攻撃しており、多くの人びとが犠牲となっています。6月11日には、南部の主要都市アデンの住宅地が激しい爆撃にさらされ、MSFは女性と子どもを含む100人以上の治療を行いました。市内のMSF病院のすぐ近くに爆弾が落とされるなど、医療施設も攻撃の対象となっています。8月21日にタイズ州を襲った空爆では、犠牲となつた65人のうち17人が子ども、20人が女性でした。州内20カ所の病院のうち、機能している7つの病院で600万人をカバーしなければなりません。

COUNTRY DATA

資本主義の北部と社会主義の南部が1990年に統合。北部出身のサレハ大統領が独裁政権を敷くも、2011年の民主化運動で退陣。後任の南部出身でスンニ派のハディ暫定大統領に対し、北部を基点とする反体制派武装勢力の「フーシ派」が反発。政治的混乱が拡大する中、今年1月、大統領官邸を制圧した。今年3月に紛争が激化。現在に至る。

市民に大きな犠牲。医薬品も不足

VOICE 派遣スタッフの声

～現地活動に参加して～

シェラレオネ



オレンジのフェンスの向こうには、患者の計り知れない苦しみがある。

母の叫び

テント式のエボラ治療センターで、患者の隔離エリアを閉っている、ビニール製のオレンジ色のフェンス。その内と外で、世界は大きく隔てられている。内側にあるのは、激しい孤独と苦痛の世界だった。

エボラと闘う気力や生きる希望さえも激痛にもぎ取られ、か細い声で「早く死なせてくれ」という患者。私たちは、少しでも彼らの尊厳を保ち、苦しみを軽減する努力しかできない。彼らが点滴や食事のサポートと自らの免疫力でエボラウイルスに打ち勝ってくれる、その限られたチャンスに賭ける。

カリルはまだ1歳にならない男の子だった。彼の母と、3人の兄も、相次いでこのセンターに搬送されてきた。父親はすでに亡くなっていた。2週間ほどして母と上の2人の兄は治癒したが、8歳の兄アリマミとカリルはまだ闘病中だった。母は2人の子の看病のためセンターに残った。アリマミは次第に歩けるようになり食事も少量ずつ取れるようになつた。だが、周囲が抱いた期待を裏切るかのように、彼は突然けいれんを起こし、その数日後に亡くなつた。母親の泣き声は、隔離テントの外まで響き続けた。それでも翌日には何かを吹き切つたかのようにカリルの世話をしていた。

下痢が続いているカリルは活気がなくなり、身体はむくみはじめ、おしっこが出なくなつた。やがて目を開けなくなり、呼吸も荒く苦しそうになつていつた。そして嘆き続ける母親に抱かれて、その小さな息を引き取つたのである。立て続けに幼いわが子を失つた母は取り乱し、額を地面に打ちつけ、悲しみをあらわにした。既に涙は枯れきついていた。

「なぜエボラは広まつた？」

救急専門医
中山 恵美子
Emiko Nakayama

千葉県出身。2006年東京女子医科大学医学部卒業。東京女子医大東医療センターを経て、現在は亀田総合病院救命救急科医長を務める。2013年よりMSFに参加し、アフガニスタンで半年間活動。2014年12月から3ヶ月間、シェラレオネでエボラ緊急援助活動に参加。



患者の待つ病棟に赴くにはしっかりと防護服を着用しなければならない。

エボラの背景に見えたもの

「なぜエボラがこんなにも広まつてしまつたのだと思う？」。その晩、現地スタッフのクロードが静かに問い合わせた。

この国に来る前の私であれば、「埋葬の習慣、病態への理解力、そもそも医療レベルや感染対策など多くの要素がある」、そう答えていただろう。しかし、この日を境に私は一つの疑問を抱かずにはいられなかつた。人びとが正しい知識を持つたとしても、苦しみ弱っていくわが子を抱きしめることもせず見ていたらどうだろうか。一家を支えてきた父の亡骸に敬意を示せない埋葬で、その生涯を締めくくることができるだろうか。エボラは、病に倒れた人たち、また彼らを敬愛した人たちの愛情や感謝、尊敬という、人間のもつ美しい感情に乗じて拡散したのであれば、こんな苦しみを味わう

ブレーキを踏んだ援助

国際社会がもつと早く手を差し伸べていれば、こんな苦しみを味わう



1 ガザ地区ハーネヌスのテント病院にて、持っていたガス缶をイスラエル兵に武器と誤認され射撃されたナディールさん。大学で建築を学んでいたが、爆発で大やけどを負い鉛筆も持てない状態で復学できずにいる。
2 ガザ地区の8歳児は封鎖のもとで生まれ育った。2回の大殺りくと4回の戦争を体験している。町の家屋は再建されないまま。
3 ガザで現地スタッフに医療研修を行う。以前、看護師たちは「集中治療」とネット検索して知識を得るしかなかった。

封鎖、分離壁、検問、威嚇射撃、家宅侵入、家族の未決勾留……。イスラエル軍の占領政策によってパレスチナの人びとは想像を絶する苦難に耐え続けています。同地で15年以上にわたり活動を継続してきた国境なき医師団(MSF)は、すでに限界に達した人びとの苦しみを国際社会が容認していることに強い危惧を抱いています。

占領も苦しみも黙認は許されない



COUNTRY DATA

1948年のイスラエル独立宣言を発端に4次にわたる中東戦争が起ころ。1993年、パレスチナ解放機構(PLO)とイスラエル政府が和平協定、1996年、ヨルダン川西岸とガザ地区から成る暫定自治政府が発足。ハマスは現在政府の一角を占めるが、イスラエルを認めてはおらず、武力衝突が続く。MSFは1989年からガザで活動を開始し、現在はヨルダン川西岸でも活動。

昨夏、ガザ地区で起きたイスラエル軍と同地区を実効支配しているハマスとの51日に及ぶ激しい戦闘で、約7000人が女性と子どもでした。停戦から1年あまりを経ても医療ニーズはぼう大で、MSFの診療所には多くの人が治療、再建手術、リハビリ、心理ケアを求めて来院。300人の名前が再建外科の待機リストに記載されています。

2007年に始まったイスラエル軍による封鎖は、今回の停戦後、さらに厳しさを増しています。ライフルラインを断たれた人びとは、自家発電機や悪質なポンベ、石油ランプを使わざるを得ず、そのための事故で重度のやけどを負う人が増えています。人びとをめぐる状況は、悪化こそそれ何一つ改善していません。

ヨルダン川西岸地区の人びとにとつてもまた、苦しみは日々の生活

と共にあります。イスラエルによる入植や軍隊配備、検問所の設置などにより、パレスチナ人が住めるのは同地区の40%未満。自由を制限されたり、一方的暴力、財産の搾取、不倫や強制結婚などにさらされ、多くの人がも影響が最も深刻なのは、子どもたちです。MSFが2014年に対応した心理ケアの患者254人の内、10歳未満は25%、15歳未満まで含めると半数にも達しています。

両地区の人びとが負う苦しみ

イスラエル人がハマスによるガザからの攻撃に脅え、空襲警報が心の傷となっているのは事実です。しかし、そうした不安とイスラエル政府の占領政策に関する自己防衛論はパレスチナ人の心身にもたらす壊滅的な影響を正当化するものではなく、イスラエル人の保護策は人道の観点から吟味されるべきです。許されざる占領を国際社会が容認し続ける中、ガザとヨルダン川西岸の苦しみは限界に達し、しかもその終わりはありません。MSFは援助が逆に占領を助長してはいないかとの思いと、惨状から目をそらしたくなる気持ちの間でもがきながら、パレスチナ人の心身の傷を癒やすことに注力しています。

唯一の解決策は占領の終結

この教訓を胸に刻んで世界が協力しなければ、同じことはどこで起きてもおかしくない。死者1万人以上にも及ぶエボラ出血熱の惨状、カリル、アリマミ、そしてその母親の苦しみを無駄にしてはいけない。

ACTIVITY NEWS
IN FOCUS

地中海
THE MEDITERRANEAN



生死を分ける漂流から 小さな命をも守るために

2015年8月5日、リビア沖の地中海で約600人の難民を乗せた漁船の転覆事故が起きました。船に乗っていたパレスチナ出身のモハメドさん(写真右)と、1歳になる娘のアジールちゃんは、国境なき医師団(MSF)に救助され一命を取り留めることができました。彼らのように、紛争や極度の貧困、人権侵害などに苦しむソマリアやシリア、ナイジェリアなどの国から、簡素な船で地中海を渡り、欧州を目指す人が日々増加しています。船上の環境は劣悪で、体調を崩し、命を落とす人も多く、海難事故も後を絶ちません。彼らにとっては、安全な生活を得るための、まさに命をかけた航海なのです。MSFは、2015年5月から救難活動を開始。3隻の救難船(うち1隻はNGO団体MOAS*と共同運航)をフル稼働し、2015年8月までに1万1482人を救助しました。

* MOAS=Migrant Offshore Aid Station (「漂着難民の救護所」の意味)



- 1 モハメドさんは、MSFに救助された直後、水に沈んでいた娘のアジールちゃんを引き上げ、命を救うことができた。乗船者のうち助かったのは370人余りだった。
- 2 別の日に、波間に漂う簡素な木造船を発見し救助に向かう。全長18メートルの船には561人もが乗船していた。
- 3 MSFの救助船に引き上げられる人びと。この後、彼らのほとんどがすぐに深い眠りへと落ちていく。
- 4 救助後、食事を配るMSFスタッフ。おそらく航海に出で以来、彼らが初めて口にする温かい食事だ。
- 5 MSFの海難救助船内では医療スタッフが、脱水症状、燃料事故による熱傷、重度の日焼け、低体温症などの患者を治療する。急を要する産科救急や蘇生、一次救命処置にも対応している。



2016年

1月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

2月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29

3月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

4月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

5月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

6月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

“一番の課題は、人びとが得られる医療が極めて限られてること。アゴクでは食糧支援やMSF病院があると周辺に伝わり、多くの人が移り住んでニーズはさらに拡大しています”

トリシア・ニューポート／MSF医療チームリーダー
南スーダンでは、物資の輸送と供給も大きな課題。内戦のため安全な陸路の確保は難しく、空輸に頼る。しかし、特に雨季には離着陸さえままならず、人口の推移や内戦・天候により変化する医療ニーズに応じて物資の在庫管理を行うことは、MSFにとって大きな挑戦。写真はアゴクのMSF病院で結核患者を診療する医師。



活動地からの声

50万人が戦禍を逃れ、国外へ

エチオピアにおけるMSF活動責任者
シルヴァン・ペロン

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）による
と、エチオピアには20万人以上の南スーダン人難民
が滞在しています。新たに到着した人びとの生活は不安定で、避難中にマラリア、下痢、皮膚疾患など
にかかる方が大勢います。UNHCRはより手厚い保護と援助を行うため、エチオピア政府と連携して
キャンプ移転に着手し、国境付近のリトゥカ（写真）とニブニブから新設のジュウェイへ4万人以上が
移住しました。MSFは入国地点バガケで週6日、診療を行うほか、移住に合わせて活動の軸足をジュ
ウェイに移しています。一般診療と救急医療、一部の入院治療も行い、今後、産科とこちらから出向いて
医療を提供するアウトリーチ活動も開始する予定です。（2015年5月末時点）



“南スーダンは1つの家族なのに、指導者たちはまるで平和を望んでいないかのよう。ニュースにはならなくても、私たちのことを忘れないでください”

ピーター・ガトワク・ビート／
MSFランキエン病院の現地臨床スタッフ
ピーターは2013年12月、ボルの武力衝突で親戚3人をなくし、水たまりの水でしおぎながら5日間歩いてランキエンに
たどりついた。今もボルにいるはずの親戚や元同僚の消息は不明で、家族も離れ離れに暮らす。

命をつなぐ医療も標的に
2015年8月、体制派・反体制派の両陣営が停戦の合意文書に調印しました。これまで何度もなく交わされた停戦合意は、時をおくず武力衝突が再燃。国民と世界の期待はここごとく裏切られました。国内避難民150万人、国外への難民は50万人を超えて、その数はさらに増え続けています。特に北東部では武力衝突が激化し、医療施設の破壊・略奪も起きて、患者・医療従事者が一時退避をする事態にもなっています。

「このような状況下では、住民や避難者が、医療や人道援助を受けられません。紛争の全当事者は、民間人と医療施設を尊重すべきです」と、南スーダンMSF活動責任者ボル・クリチャリーは繰り返します。増加する避難民・難民は既存の援助体制や施設を圧迫し、過密と衛生設備不足で人びとの健康状態は急速に悪化しています。

さらに、国の機能不全が続く中、紛争地域以外の地域でも保健医療の整備は進まず、産科・小児科の診療、予防接種や栄養失調治療などの基礎医療も、国際援助に依存する状況が続いている。MSFは推移する情勢とニーズを見極めながら活動を調整し、医療を提供続けています。



“キャンプに新たに到着する人や患者の大半は女性と子どもです。人口の急増で、通路や水たまりで寝るしかない人がたくさんいます”

ピクトル・エスコバル／
マラカルのMSFプログラム責任者
マラカルのキャンプでは避難民の健康状態が6月以降急激に悪化し、6月前後で1週間あたりの下痢患者数は倍増、呼吸器感染の患者数は80%増、マラリアが約3倍増に。キャンプ内のMSFの1週間の診療件数も、6月の250件から8月は400件超に増加。



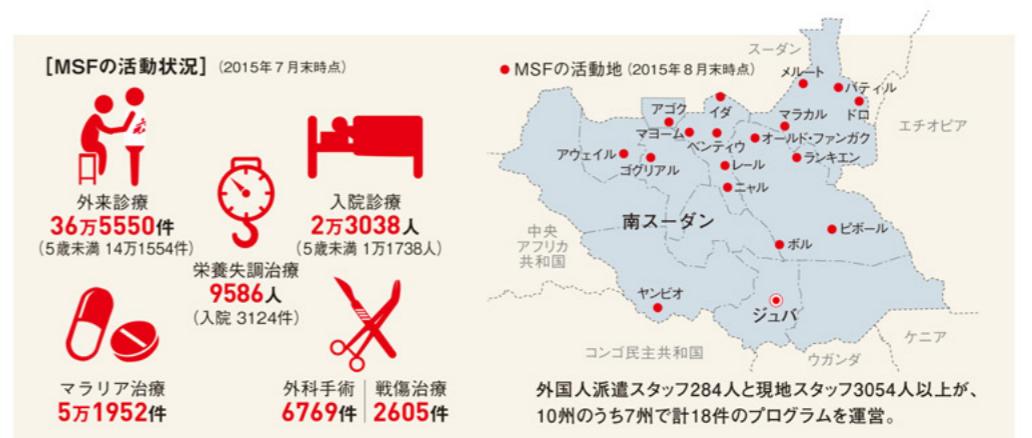
2013年末、政治的対立に端を発した内戦は民族間や地元勢力間の対立に広がり、事態収拾までには長い道のりが待っています。国の安定化が程遠い中、紛争地域以外でも基礎医療の絶対的な不足は深刻なままであります。

再燃を重ねた内戦 拡大する医療ニーズ



“(コレラによるショック状態から)おかげさまで回復しました。コレラにかかった人には、MSFの治療センターを教えてあげたい”

マデリンさん／MSFコレラ治療センターに救急搬送された患者
南スーダン保健省が6月23日、コレラの流行を宣言。MSFは現地保健当局と協力し、首都ジュバやボルで対応にあたる。7月末までに感染者数は1244人を超え、39人が亡くなっている（南スーダン保健省、世界保健機関調べ）。



COUNTRY DATA

2011年7月に独立を果たすも、2013年末の内戦ぼっ発以降、北東部を中心に戦闘が頻繁に発生。紛争当事者間ではこれまで複数回、停戦の合意がなされているが、その度に戦闘が再燃。国内外で、200万人もの避難民・難民を生む事態となっている。



フィールド・ストーリーズ

人道援助の現場で出会った人ひととの交流、明日への活力源となった出来事など。
国境なき医師団(MSF)のフィールドでの活動中に、スタッフが出会ったストーリー。



ミーティングの後、チームでのおしゃべりはくつろぎのひととき。(写真左が筆者)



雨季には病院の周囲も水浸しに。

朝から40度を超えていた気温計。



いくら助産師とはいえ……!! 驚きと感謝の誕生会

村上千佳 助産師
Chika Murakami

2010年の大地震からの復興も進み、同年に大流行したコレラも下火になり、ハイチの首都ポルトープランスから西に40kmにある町レオガンにMSFが設置した病院も、役目を終える時期になりました。私は2013年12月から1年8ヶ月にわたって産科病棟で活動してきましたが、その中で思い出に残る出来事があります。

ちょうど3日前に産科のクリスマスパーティーがあったばかりにもかかわらず、スタッフが私の誕生日パーティーを企画してくれました。でもその当日、大雨が降ってパーティーを主催した夜勤スタッフが乗った車が病院までの道で動けなくなってしまったのです。翌朝あらためて開かれたパーティーに行ってみると、ケーキの脇にはナイフの代わりに、産婦を人工的に破水させるために使う、プラスチック製の器具が置いてありました。さすが助産師!!と、一同大爆笑。しかしいくら何でもその器具でケーキを切るわけにはいかず、食堂からナイフを探してきて無事にケーキカット。誕生日を祝いました。大雨の中、大荷物を持って車を待っていた夜勤スタッフのみんなに心から感謝した1日でした。



ケーキの左側に置いてあるのが
実は破水用の器具でした。



本物のナイフが見つかって無事にケーキカット!の瞬間。



初めてのキャンプでの活動 厳しい環境を体感

菊地寿加 看護師
Suga Kikuchi

独立後も内戦が続いている南スudan (p.10-11記事参照)。私は北部のメルートという小さな町の、国内避難民キャンプに併設されている病院へ派遣されました。

今回初めてMSFの活動に参加し、日本での勤務経験しかなかった私には、ここでの経験は驚きの連続でした。まず、何より暑い! 室内の温度が40度以上あり、体温計や血糖測定器も時折正常に作動しません。明らかに高熱ではない患者さんなのに体温計で42度を記録したこともあります。

それから、病院には一応ドアはありますが、たいてい開け放しているので、外から小さな侵入者がしばしばやってきます。ネズミや猫やハリネズミです。私は薬の在庫確認をしているときに素手でネズミをつかむという楽しい経験をしました……。薬を保管している棚を開けたら子猫が寝ていたこともあります。

病院にやってくる患者さんの生活状況はとても厳しいことが多いです。でも、とても明るく、たくましく、こちらが元気をもらい、学ばせてもらった派遣でした。



1 MSFが援助を提供する、ナイジェリアの避難民キャンプ。暴力から避難してきた人びとが過密な環境で暮らす。

2 難民キャンプのテントで出産した女性。「食糧を5日間入手できない。将来が不安」。

3 チャドの難民キャンプの心理ケアのセッションで、12歳の少年が描いた暴力の記憶。

ナイジェリア北東部では、過激派組織ボコ・ハラムの活動が激化し、政府軍との戦闘や無差別の襲撃を始めた多くの人びとが避難する事態に陥っています。2015年に入つてからだけで1300人以上がボコ・ハラムの暴力で命を落としており、その多くが子どもです。一般市民が標的になり、女性の拉致や性暴力も報告されています。

避難キャンプで暮らす女性ファティマさん(45歳)の村も襲撃を受け、妹が拉致されたといいます。「夜10時ぐらいでした。武装した男たちが家々に押し入り、焼き払いました。多くの人が殺されました。私たちも森に逃げ込み、町に通じる大きな道に出るまで24時間も歩き続けました。妹は今も消息不明です」

国連機関の推計ではナイジェリア北東部の住民約140万人が国内で避難し、約17万人はチャド湖周辺の近隣国に逃れました。しかし、暴力

暴力の被害を受けた子どもたちの心理状態も深刻です。チャドの難民キャンプで暮らす16歳の少女アベニさん(仮名)は、両親も、近所の人びとも殺されてしまったナイジェリアの故郷の村から、幼い弟とおい、そして近所の子4人も連れて逃げてきました。異国の難民キャンプで6人の子の面倒を見る彼女は、「繰り返し恐怖がよみがえって、眠ることできません。将来が完全に見えなくなつて落ち込んでいます」と、M.S.F.の心理療法士に話しました。凄惨な暴力に家族を奪われ、道中の恐怖に耐え、逃げ延びた先は砂漠の真ん中での過酷なテント生活……。多くの子どもたちが心に抱える計り知れない苦しみを、M.S.F.は心理ケアの提供によって軽減する取り組みを続けています。

国境を越えて広がる暴力

ナイジェリア北東部では、過激派組織ボコ・ハラムの活動が激化し、政府軍との戦闘や無差別の襲撃を始めた多くの人びとが避難する事態に陥っています。2015年に入つてからだけで1300人以上がボコ・ハラムの暴力で命を落としており、その多くが子どもです。一般市民が標的になり、女性の拉致や性暴力も報告されています。

MSFは、避難先でも苦難を強いられる人びとと地域住民に周辺地域の各所で援助を提供。栄養失調などの疾病治療、攻撃による負傷者の治療にあたっています。

MSFは、避難先でも苦難を強いられる人びとと地域住民に周辺地域の各所で援助を提供。栄養失調などの疾病治療、攻撃による負傷者の治療にあたっています。

過激派の暴力が越境

過激派組織「ボコ・ハラム」の暴力の影響が、ナイジェリアから周辺国にまで広がっています。襲撃を生き延び、心身に傷を負いながら、先の見えない避難生活を送る人びとに、国境なき医師団(MSF)は各地で援助を提供しています。



も越境して広がっています。チャド湖周辺では7月から相次ぐボコ・ハラムの侵入と襲撃に対応するため、チャド政府軍が展開し、戦闘によつて周辺住民も避難を余儀なくされる事態に陥りました。

MSFは、避難先でも苦難を強いられる人びとと地域住民に周辺地域の各所で援助を提供。栄養失調などの疾病治療、攻撃による負傷者の治療にあたっています。

MSFは、避難先でも苦難を強いられる人びとと地域住民に周辺地域の各所で援助を提供。栄養失調などの疾病治療、攻撃による負傷者の治療にあたっています。



あなたの街でお会いしましょう

もう見かけられた方もいらっしゃるかもしれません。MSFでは今、首都圏と関西の駅前広場などで、MSFの活動をご紹介し支援の輪に加わっていただく、街頭キャンペーンを行っています。紛争地へ、被災地へ、医療が不足しているへき地へ。寄付にこめられた皆さまの気持ちを携え、海外派遣スタッフは活動地に向かいます。支援者になっていただくことは、国境を超えて命に向き合う、その仲間になっていたしたことにはかなりません。

「今日は会えてよかった。あなたに今日会わなかったら、きっと何もしなかったかもしれない。ありがとう」(街頭で支援者になってくださった方の言葉)

“命を救う仲間”にまたひとり出会えた喜びを胸に、街頭キャンペーンスタッフは今日も活動中です。見かけられたら、どうぞお気軽にお声がけください。



街頭
キャンペーン
実施中

寄付金控除のご案内

国境なき医師団（認定NPO法人）への寄付は、所得税、法人税、相続税、一部の自治体の住民税について、税制上の優遇措置の対象となっております。

個人による寄付（所得税の控除について）

①か②のいずれか有利な方を選択できます。詳しくは最寄りの税務署にお尋ねください。

①所得控除 下記の計算式による金額が「所得」から控除されます。

$$\text{寄付金合計}^* - 2000\text{円} = \text{寄付金控除額}$$

※ 所得額の40%が上限。

②税額控除 下記の計算式による金額が「所得税額」から控除されます。

$$(\text{寄付金合計}^* - 2000\text{円}) \times 40\% = \text{税額控除額}^*$$

※ 1 所得額の40%が上限。 ※ 2 所得税額の25%が上限。

控除を受けるには確定申告が必要となります。年末調整では申告できませんので、ご注意ください。
住民税については各自治体へお問い合わせください。

法人による寄付

国境なき医師団への寄付は、一般の寄付金の損金算入限度額とは別に、下記の特別損金算入限度額の範囲内で損金に算入できます。
詳しくは最寄りの税務署にお尋ねください。

$$(\text{資本金等の額} \times \frac{\text{当期の月数}}{12} \times 0.375\%) + (\text{所得の金額} \times 6.25\%) \div 2 = \text{特別損金算入限度額}$$

寄付に関するくわしい情報はこちらから

Tel 0120-999-199
(通話料無料、9:00~19:00 無休)

Web www.msf.or.jp

携帯サイト www.msf.or.jp/mb/
右のQRコードからもアクセスいただけます。



教えるはずの、多くの命のために。
遺産・お香典からの寄付で、その遺志は希望に変わります。
遺産や相続財産の有意義な活用のために、MSFへの寄付を選ぶ方が増えています。パンフレットをご希望の方は、同封のチラシをご返送いただきか、下記のウェブサイトまたは電話にてお申し込みください。
MSF日本に寄付していただいた遺産は非課税扱いとなります。

Web www.msf.or.jp Tel 0120-999-199
(9:00~19:00 無休)
(トップページ下段 → 資料請求)

国境なき医師団

支援者のひろば

『REACT』2015年6月号で、ご寄付のきっかけや、そこに込める思いについてお尋ねしたところ、数多くのご回答をいただきました。誠にありがとうございました。ご家族との思い出、世界の人びとへの思い……。どのメッセージにも、国境なき医師団（MSF）の援助活動にご自身の大切な思いを託されていることが伝わる言葉があふれていました。すべてを掲載できないのが大変残念ですが、一部引用して紹介させていただきます。

Q. あなたがMSFへの寄付に込める思いとは？

愛知県 深谷芳朗様

自らに及ぶ危険を顧みず、紛争地に出かけ医療活動される医師とスタッフの方々、既存の国際組織にくみしない「国境なき医師団」を尊敬しています。特に「国境なき」というこのフレーズに魅力を感じています。

私の母親が助産師で、また娘の1人は、2人の子育てをしながら医師としてがんばっています。サラリーマンであった小生は仕事で海外出張があったため、日本国内に留まらず世界レベルで活動される「国境なき医師団」に親近感を覚えます。医師でない小生がお手伝いできる業務があれば、ご協力したいところですが……（※2015年12月で70歳）。わずかな寄付は一生続けるつもりです。

MSFの益々のご発展を祈念します。

ご自身やご家族の経験から、MSFを身边に感じてくださっていること、大変ありがとうございます。「わずかな寄付」とご謙遜されていますが、金額にかかわらず、多くの方が活動に共感し、支持してくださっていることこそが、スタッフを現地に向かわせる最大の励みです！ また活動地でも「遠い日本から私たちのことを思い、支援してくださる人がいることがうれしい」という感謝の声をよく聞きます。どうぞこれからも、素敵なお家族と共に、MSFのかけがえのないパートナーとして、世界に思いをはせていただけたら幸いです。

茨城県 坂野浩子様

テレビのニュースなどでエボラ出血熱の大流行を知りましたが、そういう病気があるのかぐらいに思っていました。MSFから届いたメールを読んで初めて、遠くの国が身近なことに感じました。現地で命がけでがんばっている日本人スタッフや諸外国の方々の熱意に感激しました。写真の中には私が今まで見たことがなかった、やせ細った体や腕、足の子どもたちの姿、大変な中の澄んだまっすぐな瞳……心が揺れました。いつの時代も子どもは宝物です。国の紛争や病気から守るのは大人の仕事だと思います。この宝物の一人ひとりが安心して、おなかいっぱい食事がとれて、家族と共に幸福に暮らせる日が来るよう願い、ささやかですが支援を続けていきたいと思っています。



現地の人びとや子どもたちに思いを寄せる、優しいメッセージをありがとうございます！ 日本からはかけ離れたように思える出来事でも、皆さんと世界の活動地の人びとをつなぎたい——それが、「証言活動」として、MSFが世界の人道的危機について情報を発信しつづける原動力になっています。今後とも、『REACT』をご愛読いただけたら幸いです。

引き続き、
お便りを
お待ちして
います

◎「届け、ワクチン！2015」キャンペーンに予防接種の思い出をお寄せいただいた皆さんも、誠にありがとうございました。頂いたメッセージは、キャンペーンを支える力になります。ご協力に深く感謝申し上げます。
MSFへの支援に込める皆さんのメッセージを、本誌裏表紙右下に記載のアンケートと共に、どうぞお送りください！

